

従来どおり前年度検診実績及び協議事項について  
議論を行う方向で平成21年度の委員会より行うこ

とが示された。

## 肝臓がん検診従事者講習会及び肝臓がん検診症例研究会

日時 平成21年2月14日（土）  
午後4時～午後6時

場所 倉吉未来中心「セミナールーム3」  
倉吉市駄経寺町

出席者 106名  
（医師：100名、看護師・保健師：5名、  
検査技師：1名）

吉中正人先生の司会により進行。

### 講演

鳥取県肝炎対策協議会長 村脇義和先生の座長

により、福山市民病院がん診療統括部長 坂口孝  
作先生による「肝細胞癌の診断と治療」の講演が  
あった。

### 症例提示

石飛誠一先生の進行により、3地区より症例を  
報告して頂き、検討を行った。

1) 東部（1例）－

鳥取赤十字病院 満田朱理先生

2) 中部（1例）－

鳥取県立厚生病院 万代真理先生

3) 西部（1例）－山陰労災病院 西向栄治先生

## 肺がん疑いに対するフォロー指針の確立に向けて

鳥取県成人病検診管理指導協議会肺がん部会  
鳥取県健康対策協議会肺がん対策専門委員会

- 日時 平成21年2月28日（土） 午後2時30分～午後4時
- 場所 倉吉未来中心「セミナールーム1」 倉吉市駄経寺町
- 出席者 岡本健対協会長・清水部会長・中村委員長  
(22人)  
天野・石井・工藤・杉本・陶山・谷口玲子・中本・引田・  
吹野・藤井・宮崎・山下・山家・吉田・吉中各委員  
県健康政策課：川本保健師  
健対協事務局：谷口事務局長、岩垣係長、田中主事

### 【概要】

・検診発見がん患者確定調査の結果、近年Ⅰ  
期肺癌が多く発見される傾向が続いてい  
る。予後調査においては、5年生存率は

47.1%、10年生存率は29.6%で、女性の方  
が予後は良かった。

・判定基準を見直した16年度以降、がん疑い  
と診断された者が多く見つかったが、

確定調査の結果、検診から1年半以上経過しても診断がつかないままで経過観察となっているケースが多い。「がん疑いの者」のフォローは3年間とする方向で次回検討していくこととなった。

## 挨拶（要旨）

〈岡本健対協会長〉

委員の皆様には、健対協事業にご協力頂き有難うございます。今後共、よろしくお願い致します。

〈清水部会長〉

肺がん検診は順調に進んでいますが、検診の受診率を更に上げるといふ国の方針もありますので、努力していかなければならないと思っています。

一方、地域医療においては医師不足という問題があり、今後、検診業務において医師負担が中々難しくなる可能性がありますので、お知恵を頂き、今後も順調に進めて行きたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

〈中村委員長〉

検診発見がん患者の予後調査を21年間行っています。21年間分のデータが蓄積されているということは、皆様のご尽力の賜物と思えます。

解析の結果、皆様と考えていきたいことが2点あります。一つは、ここ近年受診率があまり上がっていない。このままでは国が言っている目標受診率50%達成には程遠い。

二つ目は、肺がん疑いの患者が非常に多く見つかっているが、その方のフォロー、果たしてがんなのか良性なのか、どうしたらいいのかという問題について、真剣に考え、取り組み、何らかの方針を出さないといけない時期がきている。

## 報告事項

### 1. 平成19年度肺がん検診最終実績報告並びに平成20年度実績見込み及び平成21年度計画について：川本県健康政策課がん・生活習慣病担当保健師

〔平成19年度実績最終報告〕

対象者数175,897人のうち、受診者数49,806人、受診率28.3%で、前年度より510人増、1.8ポイント増加した。

対象者数が平成18年度に比べ約1万人減少した。減少の主な理由は、智頭町、琴浦町においては対象者の正確な把握に努めた結果、また、米子市においては、算出方法の統一化を図ったことにより対象者数がそれぞれ減少した。

このうち要精検者は1,940人、要精検率3.90%で、平成18年度より160人、0.29ポイント増加した。精密検査受診者は1,656人、受診率85.4%で、昨年度より0.8ポイント増加であった。精密検査の結果、肺がん35人、肺がん疑い88人であった。

判定基準が見直された平成16年度以降、要精検率は増加傾向となり、がん疑いの症例が多い。がん発見率（がん／受診者数）は0.07%で、陽性反応適中度（がん／精検受診者数）は1.8%であった。

X線受診者総数49,806人のうち経年受診者は37,104人、経年受診率74.5%であった。喀痰検査の対象となる高危険群所属者は6,365人（12.8%）で、そのうち喀痰検査を受診した者は2,996人で、X線検査受診者の6.0%であった。そのうち要精検者は2人、要精検率0.07%で、精検結果はその他の疾病が1人、精検未受診者が1人であった。市町村から精検未受診者に問い合わせをしたところ、精検を受診しがんと診断されているが、医療機関から紹介状が市町村に返送されていないことが分かった。

経年と非経年受診者、高危険群と非高危険群所属者のがん発見率の比較を行った。経年受診者のがん発見率は0.067%で、非経年受診者のがん発

見率0.079%で、非経年受診者のがん発見率の方が1.17倍高かった。また、高危険群所属者6,365人のうちがんが8人発見され、がん発見率0.126%、非高危険群所属者43,441人のうちがんが27人発見され、がん発見率0.062%で、高危険群所属者のがん発見率の方が2.10倍高かった。

平成17年度及び平成18年度と比較すると、経年受診者と非経年受診者、高危険群所属者と非高危険群所属者の有意差が年々低くなっている。

[平成20年度実施見込み及び平成21年度事業計画]

平成20年度実績見込みは、対象者数182,941人、受診者数は45,906人である。また、平成21年度計画は、対象者数182,778人、受診者数は49,127人を予定している。

平成20年度から特定健診が始まり、がん検診の受診券配布方法の変更等について住民への周知不足、また、自己負担額を一部増額したところもあり、受診者数が前年度より約4,000人減少する見込みである。また、対象者数は平成19年度より約7,000人増加見込みであるが、国が示している対象者の算定方式を取り入れられた市町があることが関係している。

肺がん検診受診率が低い米子市に対し、2年前から健対協、西部医師会を通じて、医療機関検診を導入して頂くよう要望してきたが、財政上の理由で導入されずに現在に至っている。

平成21年度実施に向けて、市長や担当課長等と協議を行い、前向きに検討することとなっていたため、西部医師会等の調整を行っていたが、米子市より21年度予算は確保できなかったと文書にて回答があったと中村委員長より報告があった。受診率向上に向けて、今後も引き続き、米子市に対し医療機関検診の導入について要望していくこととなった。

また、受診者数、受診率には検診体制や自己負担金が影響する要因と考えられるため、各市町村における対象者の把握方法、自己負担額について3月5日の総合部会で健康対策課より報告するこ

ととなった。

**2. 平成19年度保健事業団肺がん集団検診結果について：**大久保委員は学会出席で欠席のため資料提示のみであった。

**3. 平成19年度肺がん検診発見がん患者の予後調査の確定について：**中村委員長

昭和62年から平成19年までに発見された肺がん又は肺がん疑いについて予後調査した結果、肺がん確定診断923例、内訳は原発性肺癌822例、転移性肺腫瘍101例であった。5年生存率は47.1%、10年生存率は29.6%で、女性の方が予後は良かった。

平成19年度については、以下のとおりであった。

- (1) 受診者数は、昨年度から50,000人を割った。要精検率は増加し続け、精検受診率も引き続き高い。がん発見率は0.088%、対人口10万あたり88人で、昨年を下回った。肺がん疑いのまま経過観察中の患者は依然として多く、継続フォローの重要性が増している。
- (2) 予後調査では原発性肺がん44例、転移性肺腫瘍6例、合計50例の肺がん確定診断を得た。
- (3) 胸部X線でのみ発見された肺がんの割合は44/44例(100%)と引き続き高い傾向が続いている。内訳はE発見が42/44例(95.5%)と高率であった。
- (4) 女性肺癌は22/44例(50.0%)、腺癌は31/44例(70.5%)と高率であった。
- (5) 手術症例の割合は31/44例(70.5%)と増加し、その背景として、I期肺癌の割合の増加21/31例(67.7%)があり、近年I期肺癌が多く発見される傾向が続いている。
- (6) 腫瘍径は平均23.8mmで例年より小型となり、2cm以下が18/44例(40.9%)あった。
- (7) 転移性肺腫瘍は6例で、原発は大腸がん2例、乳がん1例、胆管がん1例、尿管がん1例、後腹膜腫瘍1例であった。
- (8) 施設検診と車検診との比較を行い、要精検

率は施設検診4.4%、車検診3.6%と施設が高く、特に中部地区が10.8%と高い傾向が見られた。原発性肺がん44例のうち、車検診で29例（発見率0.085%）、施設検診15例（0.096%）であった。

判定基準を見直した16年度以降、がん疑いと診断された者が多く、平成19年度検診発見がん及びがん疑い123例のうち、確定癌は50例、経過観察中43例、肺癌ではなかったものが17例、調査中のため診断が不明なものが10例であった。このように検診から1年半以上経過しても診断がつかないまま経過観察となっているケースが多い。

「がん疑いの者」のフォローは3年間とする方向で次回検討していくこととなった。

#### 4. 平成20年度肺がん医療機関検診読影会運営状況について（1月末集計）

〈東部：山家委員〉

東部医師会を会場に年間138回開催した。1市3町を対象に11,227件の読影を行い、1回の平均読影件数は81件であった。読影の結果、C判定2,039件（18.15%）、D判定125件、E判定が413件であった。E1判定は404件（3.60%）であった。比較読影は7,939件（70.7%）であった。喀痰検査は受診者総数の7.3%にあたる821件実施された。

従事者講習会を平成20年10月30日に開催した他、平成21年3月23日に肺がん医療機関検診読影委員会を開催する予定である。

〈中部：引田委員〉

県立厚生病院を会場に年間33回開催した。1市3町を対象に1,300件の読影を行い、1回の平均読影件数は39件であった。読影の結果、C判定23件（1.77%）、D判定3件、E判定が178件であった。E1判定は175件（13.46%）であった。比較読影は489件（37.6%）であった。喀痰検査は受診者総

数の7.9%にあたる103件実施された。

中部医師会を通じて医療機関に比較読影フィルムを提出して頂くようお願いしているが、中々改善されない。

平成21年3月16日に肺がん医療機関検診読影委員会を開催する予定である。

#### 5. その他

前回の会議において、近年喀痰細胞診検査で発見される「がん」が減少しているのは、喀痰の採取方法に問題があるのではないかという意見があり、医療機関に対し受診者にパンフレットに従って痰の採取方法の指導を徹底して頂くよう平成20年11月30日付けで文書にて通知した。

#### 協議事項

##### 1. 平成21年度におけるがん検診受診率向上に向けた県の取り組みについて

鳥取県がん対策推進計画の受診率目標50%に対し、平成19年度受診率27%で、職場や家庭内で多忙な40～50歳の検診受診率が低い傾向にある。そのため、県健康政策課においては、平成21年度事業として「がん検診受診率向上プロジェクト2009～新規受診者を掘り起こせ！～」として、休日がん検診支援事業や県民フォーラムなどを計画している。

##### 2. 胸部エックス線検査の要精検者の取り扱いについて

日本肺癌学会では、胸部エックス線検査の要精検者の取扱について、要精検者はE判定の者であり、D判定の者は含めず、D判定の中から肺がんが発見されても、発見肺がんを認めないとなっており、判定基準の見直しを行った16年度において周知しているが、再度、関係者へ周知徹底を図っていくこととなった。

## 肺がん検診従事者講習会及び症例研究会

日 時 平成21年2月28日（土）  
午後4時～午後6時20分

場 所 倉吉未来中心「セミナールーム3」  
倉吉市駄経寺町

出席者 73名  
（医師：67名、看護師・保健師：5名、  
検査技師・その他関係者：1名）

### 講 演

鳥取県健康対策協議会肺がん対策専門委員会委員長 中村廣繁先生の座長により、兵庫県立がんセンター放射線科部長 足立秀治先生による「肺癌診療におけるPET/CTの役割」についての講演があった。

吉中正人先生の司会により進行。

### 肺がん検診実績報告

鳥取県肺がん検診の実績について、鳥取県健康対策協議会肺がん対策専門委員会委員長 中村廣繁先生より報告があった。

### 症例提示

吹野俊介先生の進行により、3地区より症例を報告して頂き、検討を行った。

- 1) 東部（1例）－鳥取市立病院 山下 裕先生
- 2) 中部（1例）－  
鳥取県立厚生病院 吹野俊介先生
- 3) 西部（1例）－  
鳥大医 胸部外科 中村廣繁先生

## 第40回中四国地方会鳥取県で開催

### 第39回日本消化器がん検診学会中国四国地方会 第39回中国四国地方胃集検の会

- 日 時 平成21年2月21日（土） 午前10時～午後5時  
22日（日） 午前9時～午後0時
- 場 所 サポート高松ホール棟4階 第一小ホール
- 出席者 岡本会長、石飛誠一・三浦邦彦・秋藤洋一各先生  
事務局：岩垣係長、田中主事
- 参加者 180名

### 概 要

第39回日本消化器がん検診学会・中国四国地方会および第39回中国四国地方胃集検の会が、標記の日程により香川県高松市において開催された。

第39回大会長の香川県立がん検診センター山ノ井昭所長の挨拶の後、午前中に一般演題14題、午後特別講演と教育講演、シンポジウムが行われた。特別講演は徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部消化器内科学教授の高山哲治教授による